

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA

NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES



ブラジル特報



特集

ブラジル政治塾

・ルーラが収監された
“「新しいブラジル」の申し子”労働者党
サンパウロからの現地レポート

・ブラジル政治はいかに
アウトサイダーの台頭を防ぐのか

あの町この町

サンルイス São Luis

新規会員募集中!

詳しくは P21 をご覧ください。



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人: 大前孝雄/編集人: 岸和田仁



三井物産株式会社 www.mitsui.com



世界の未来を、ブラジルとつくる。

〔Business innovation-1〕

鉄鉱石を安定供給し、世界経済の発展を支える。

ヴァーレ社を通じ、世界最高水準の高品位鉄鉱石を供給。増大する鉄鋼需要に応える。

〔Business innovation-2〕

水力発電事業を通じ、低炭素社会へのインフラ構築に貢献。

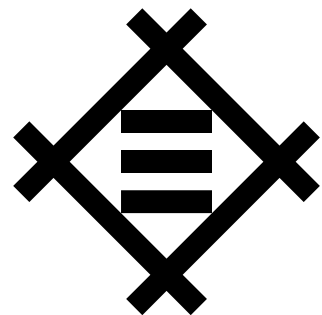
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

〔Business innovation-3〕

ブラジルで、そして世界へ。コーヒーと共に至福のひとつときを。

Mitsui Alimentos社を通じ、半世紀にわたり愛される「Café Brasileiro」を製造・販売。これからも豊かな食文化をお届けする。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



MITSUI & CO.

目次

あの町この町 サンルイス [山本綾子]	3
ブラジル・ナウ プロテストが映すブラジル経済の構造的問題 [河合沙織]	5
【特集】ブラジル政治塾 ルーラが収監された「新しいブラジル」の申し子”労働者党 —サンパウロからの現地レポート— [近田亮平]	6
【特集】ブラジル政治塾 ブラジル政治はいかにアウトサイダーの台頭を防ぐのか [舩方周一郎]	8
あなたは どう見る 日系社会 [細川多美子]	10
ブラジル現地報告 サンパウロ—グアルーリョス国際空港間連絡鉄道の開業 [平野 司]	12
連載・日系企業シリーズ第 53 回 ニチレイブラジルえび事業史 [内山善司]	13
連載・ビジネス法務の肝 ブラジル労働法改正、実務上の読み方（その 2） [柏 健吾]	14
連載・税務の勘どころ ブラジルにおける AEO 制度の最新事情 [エルソン・ブルーノ / 翻訳：吉田幸司]	15
エッセイ サバイバル・ドライブのすすめ [赤澤賢史]	16
ウーマン・アイ ブラジルのストレスマネジメント [中妻由紀]	17
ジャーナリストの旅路 「歴史」を学んだブラジル駐在 [持永秀樹]	17
連載・文化評論 追悼：ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス監督 「シネマ・ノーヴォ」を創始した「ブラジル映画の父」を偲ぶ [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
新刊書・新盤紹介	20
連載・びっくり豆知識 歴史に残る「非核化のモデル」	20
協会からのお知らせ	21



写真家田中克佳の「表紙のひとつ」
「『50 年の進歩を 5 年で』というスローガンのもと、時の大統領、ジョセリーノ・クビチェックによって建造された首都ブラジリア。1960 年の遷都以来、ブラジル政治の中心を成してきた。写真は都市の中核を成す国会議事堂。」
(65 年生まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93 年に退社後渡米し、独立。ニューヨーク在住。www.katsutanaka.com)

サンルイス São Luis

あの町、
この町

サンルイスの魅力を一挙上げるとすれば、意外にも安全に満喫できる歴史地区である。



今から 15 年ほど前、白い巨大砂丘レンソイス・マニャンセスが世

[地元住民がブラジルー美しい道と誇る「ポルトガル通り」](#)

界で注目されるようになってからは、砂丘への中継都市として多くの観光客が立ち寄るようになり、外国人観光客の数も一気に増えた。ただ、単なる通過点とされては、誕生 400 年の歴史あるサンルイス市民は心外かもしれない。

北部マラニョン州の州都サンルイスは、1612 年にフランス人によって築かれ、一時はオランダ植民地にもなった国内でも珍しい都市である。「Cidade dos Azulejos アズレージョの街」とも呼ばれ、コロニアル建築が残る古い街並みはヨーロッパから運ばれた彩色タイル（アズレージョ）が多用されていて、一帯は世界遺産にも登録されている。

ブラジル主要都市のセントロ（旧市街）の治安がなかなか改善されない中、サンルイスは 1980 年頃には建築物の保存活動をスタートし、最近ではレストランや宿泊施設、お土産屋の整備に加え、地元警察の見回りも徹底している。大砂丘を満喫する前に、外国人観光客が昼も夜も歩ける貴重な歴史地区となっている。

昼間は、美術展スペースやお土産屋など一軒一軒を回りながら、ぶらぶらと歩く。地元の民芸品は、手編みレースや椰子の一種であるブリチの繊維で作られたアクセサリーや敷物などで、サンパウロやリオ市内より種類は豊富な上、断然割安な「原産地価格」で購入できる。日本では世界各地の自然素材やフェアトレード商品が高級デパートで売られるようになったが、ここでは素朴なままの商品が無造作に売られている。



[地元で伝わる独特なレース編みの技術](#)

日没後は、多くの人が集まる広場で風に吹かれながら一休みしたい。広場の角にある「Restaurante Antigamente」はおすすめ。「レストラン・あの頃」と訳してみると、なんだか廃れたスナック風になるが、確かに郷愁を誘うピアガーデンだ。生ぬるい空気に包まれ、マラニョン料理をつまみに呑むビールはどこか懐かしい。そこから少し歩くと、暖かい街灯の光に照らされて、壁面一面のアズレージョが一際美しく輝く通り（写真上）がある。広場からはギターの生演奏と雑踏の音がかすかに聴こえ、古いブラジルにタイムスリップしたような不思議な感覚を体験できる。



山本綾子
（『ブラジル・カルチャー図鑑』著者）

グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
http://career.nikkei.co.jp

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。

日経HR
Executive

プロフェッショナル、エグゼクティブ
のための転職支援サービス

20代、30代のための
転職支援サービス

日経HR
AGENT
NIKKEI HUMAN RESOURCES

日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア9カ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュロンコン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。

NIKKEI ASIAN
RECRUITING
FORUM in 東京



日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ 株式会社日経HR TEL:03-6812-7307
e-mail: webeigyo@nikkeihr.co.jp https://www.nikkeihr.co.jp



BRASIL NOW

ブラジル・ナウ

プロテストが映すブラジル経済の構造的問題

5月21日、ブラジルで新たなプロテストが発生した。自営業のトラック運転手らが中心となり、燃料価格高騰に伴うトラック運輸業界の窮状を訴えたのだ。今回の抗議行動はFacebookやWhatsAppなどのソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)を用いて呼びかけられ、北部の一部を除くほぼ全ての州で同時に発生した。主要幹線道路には停車された大型トラックが列をなし、交通機能は麻痺状態に陥った。

ブラジルは国内物流の約6割を陸路に依存している。トラック運転手らのストライキは、単に道路渋滞を引き起こしただけでなく、結果的に国の物流の大部分をストップさせた。ストライキの発生直後から市民の生活は大きく混乱し、ブラジルにおける国内物流の脆弱さが露呈することとなった。スーパーマーケットからは食品や日用品が姿を消し、医療機関では薬品や医療資材の不足により治療や手術が受けられないケースが発生した。空港では燃料不足により複数のフライトがキャンセルされ、ガソリンスタンドでは車両の長蛇の列を前に燃料価格が急騰した。報道によれば、ブラジリア近郊のガソリンスタンドでは24日夜に1リットル=9.99レアル(約300円)でガソリンが販売されたという。公共交通機関の運行見合わせにより、大学などの教育機関は相次いで休講した。10日以上続いたプロテストは、政府がトラック運転手に対しディーゼル価格への補助金を設けることで幕引きが図られた。一方で、この特別措置「bolsa caminhoneiro」の財源は、教育・医療・衛生分野を含む政府予算の修正と、産業振興を目的に特定部門に付与してきた優遇措置の撤廃によって賄われる。トラック運転手らによるストライキは、以下の点において、ブラジルが「今」抱える課題の構造的側面を我々に示唆している。

■「再分配機構」としての連邦政府の限界

財政政策には、①資源配分、②所得の再配分、③経済の安定化の3つの機能がある。金融政策とならびマクロ経済政策の柱となる財政政策について、ブラジルでは、連邦政府が「再分配機構」としての役割を強く持つという特徴がある。1985年の民政移管以降、政府は人種や宗教などブラジルを構成する多様な社会的・経済的・政治的グループの要求を満たすべく政策運営を行ってきた。政権によって、あるいは社会・経済・政治的状况によって政策は異なるものの、いずれの場合においても、グループごとの政治的圧力の収拾や階層間の対立回避を目的として資源配分の調整が行われてきた。結果的に、政府消費支出は1980年代半ば以降増加し、

2016年には対GDP比で20%を超えた。

■ 複雑かつ非効率的な税制

世界銀行グループによるビジネス環境の現状報告『Doing Business 2018』は、ブラジルの税制を190カ国中184位と評した。複雑かつ非効率的な税制は、「ブラジル・コスト」の代表格である。税収の最大化が最優先にされた結果、高い税負担と難解な税制が構築された。これ以上の負担増が許容されない状況下で、政府は弥縫に狂奔し税制はさらに歪む。例えば今回の「bolsa caminhoneiro」は、過去に実施された特定産業向けの税減免措置や優遇措置の停止によって賄われる。大規模なプロテストや経済主体による「再分配機構」への働きかけが、複雑かつ非効率的な税制を助長する。

■ 不動のボトルネック:交通インフラの未整備

ブラジルにおける大規模なインフラ整備は1950年代に着手された。内陸部の開発と国全体の均衡的發展を図るべくブラジリアが創られ、国内自動車産業の振興もかねて広域幹線道路網の整備が進められた。以後半世紀以上が経ち、中西部におけるアグリビジネスの躍進など、ブラジル国内の経済地図は大きく変化した。にもかかわらず、長距離大量輸送機関としての鉄道や水運の整備は遅々として進まない。今回、運輸業界の窮状に端を発するストライキへの対応として、連邦政府は財源捻出を目的として数十件の道路工事案件をキャンセルした。一貫性や長期的視点を欠いた「再分配機構」には、インフラ整備は期待できそうにない。

近年、ブラジルでは抗議デモの発生と応急処置による沈黙の模索が繰り返されている。トラック運転手によるストライキは、今回のように全国規模ではなかったがここ数年毎年起きている。他にも、FIFAサッカーW杯前年の2013年に発生した大規模デモ、2015年の反政府デモは日本でも広く報道された。構造的な問題によってブラジル社会に蓄積された不満やストレスは、「再分配機構」による小手先だけの応急処置では対応できないレベルに達しているのではなかろうか。選挙を10月に控え、国民および政治家の間で何が論点として重要視されていくのか。選挙結果だけでなく、その前提部分が、長期的なブラジルの動向を占うヒントとなるだろう。

河合沙織(龍谷大学講師)



●特集● ブラジル政治塾

ルーラが収監された“[新しいブラジル]の申し子”労働者党 サンパウロからの現地レポート

筆者は2017年10月にブラジルへ赴任し、2019年9月までサンパウロ大学に籍置き、現地での長期の調査研究を行っている。2018年は10月に大統領選をはじめとする総選挙が行われるが、今年の初めにルーラ元大統領に有罪判決が下り、その後に収監されるなど、前政権与党の労働者党（PT）は厳しい状況に追い込まれることになった。本稿では、ブラジル史上かつてない一般犯罪で逮捕された元大統領ルーラの収監を中心に、総選挙を4カ月前に控えた現地の様子をお伝えする。

ルーラ支持と反対派の デモ合戦

今年1月24日、世論調査で当時（および収監後も）30%超と最も高い人気を誇るルーラ元大統領の汚職疑惑に関して、連邦裁判所が有罪判決を下した。同日、サンパウロのパウリスタ大通りで反ルーラ派が小規模なデモ集会を行った一方、ルーラが演説を行ったレプブリカ広場ではルーラ支持派の大規模な抗議集会が行われ、夜には大勢

の参加者がパウリスタ大通りまで数キロを移動しながらデモ行進を行った。横断幕には「ルーラのいない選挙は不正（Eleição sem Lula é Fraude）」などの文言が掲げられ、PT党員をはじめ中央統一労組（CUT）や社会運動団体などの支持者が、判決に対する怒りやルーラへの熱烈な支持を声高にアピールしていた（写真1）。

その後、有罪判決を受けたルーラが人身保護を申請したため、4月5日に最高裁が裁決を行うことになった。その直前には全国各地でルーラ支持派と反対派が再びデモを実施し、その様子はメディアで大きく報道された。サンパウロ市内のデモを見に行った筆者のあくまで印象だが、反ルーラ派が3日のデモでパウリスタ大通りを埋め尽くすほど勢いを増していた（写真2）。一方、ルーラ支持派による同大通りでの4日のデモは閑散とするなど、政権を追われた労働者党陣営には悲壮感や一部で諦観が漂っていた。そして、4日午後には始まり日付の変わる5日深夜まで続いた最高裁の審議は、ルーラの

人身保護申請を反対6票、賛成5票で却下する結果となった。この司法判断により、左派勢力の有力候補ルーラは大統領選での出馬の可能性がほぼなくなり、しばらくの時間的な猶予を置いた後、収監せざるを得ない状況に追い込まれた。

“Nunca antes na história deste país (この国の歴史でかつてなかった)”

しかし、最高裁が裁決を深夜に下した5日が明けてから、事態は急展開を迎えることになった。ルーラに対する出頭命令が予想より大幅に早く、翌日6日午後5時を期限として出されたのである。出頭命令が想定外に早く出たことに対して、ルーラをはじめPTや支持派は6日、サンパウロ郊外の金属労組本部に集結して強く反発し、その様子がマスコミの複数のヘリコプターで上空から実況中継された。一時は肅々とルーラ収監の手続きが進められていくと思われたが、事態は急変し一気に緊張感が高まった。筆者はPT支持派の社会運動関連の友人から、「みんな金属労組本部に集まっているから、あなたも来なさい!」と言われ、ブラジル研究者として現地の様子を観察や体感すべきではと史料した。現地までは公共交通機関で1時間半くらいであり、午後5時にはまだ何とか間に合う時間だったが、事態がどう動くか全く予想できず、暴力的な状況に陥った場合は巻き込まれる危険性も考えられた。そのため、テレビなどで状況推移の全体像の把握を優先し現場には赴かず、6日と7日の二日間ほぼ自宅に



近田亮平
(日本貿易振興機構 アジア経済研究所)

籠り、歴史的な一幕を一人で興奮しながら見守り続けた。

出頭命令期限の午後5時を過ぎても、結局ルーラはほとんど姿を見せず金属労組本部に支持者とともに籠城したまま、6日は終了した。そして翌日7日の昼前、多くの支持者が周辺の道にも溢れる中、ルーラはようやく姿を現し演説を行った。その内容や口調は、権力やエリート層に反抗する筋金入りの労組リーダーや貧困層の代表というイメージを強く印象付けるものだった。また、10月の総選挙を意識してか左派勢力の結集を呼び掛け、大統領選出馬を表明している若きリーダー2人を演説の冒頭で紹介した。ただし、その2人ともPTではなく、一人は「ブラジルの共産党」（PCdoB）のダヴィラ（D'Ávila）、もう一人は社会主義自由党（PSOL）のボウロス（Boulos）であった。大統領選に関してPTはルーラ擁立を固持しているためか、演壇場にはルーラの代替候補と目されるPTのアダッチ（Hadadd）元サンパウロ市長もいたが、ルーラはアダッチの功績を称えたものの手短に紹介しただけだった。そして、約1時間に及ぶ演説が終わるとルーラは、軍事政権下で当局に拘束された1980年を彷彿とさせるように、支持者で埋め尽くされた会場を関係者に担がれて金属労組本部の中に姿を消した。

その後、ルーラは親族との長めの“最後の昼餐”の後ようやく出頭しようとしたが、支持者たちが建物の出口を全て封鎖しルーラの収監を阻止する行動に出た。そのため、ルーラは揉みくちにされながら何度か金属労組本部に戻らざるを得なくなり、現場は騒然とした状況となった。混乱した状況が硬直し日が徐々に暮れる中、何台もの警察のパトカーが包囲するように近づくのがテレビで映し出され、緊張感が一気に



写真2 サンパウロ美術館に「ルーラ投獄（Lula na cadeia）」との文言が映し出された反ルーラ派デモ（2018年4月3日 サンパウロにて筆者撮影）

に高まった。そして辺りが暗くなる中、ルーラは支持者に見えにくい出口から当局へ出頭し、ついに収監されることになった。護送団やヘリコプターによるルーラ移送の場面はテレビ各局で生中継され、多くの国民が歴史的瞬間を目の当たりにすることとなった。

こうしてルーラは、“ブラジルの歴史でかつてない”一般犯罪で逮捕された大統領経験者となった。ルーラの出頭劇はブラジルの歴史の教科書のページを見ているようだったが、ルーラ収監直後には1980年と2018年の場面を重ね合わせる画像がインターネット上で拡散されたり、ルーラを擁護する本（註1）が期間限定で無料ダウンロード化されたりした。つまり、かつてなかったブラジルの一つの歴史は、ある程度の準備や演出をもとに創られたとも考えられよう。

『PT: o Filho do “Novo Brasil” (労働者党「新しいブラジル」の申し子)』

再民主化後のブラジルは21世紀初頭に目覚ましい発展を遂げ、Fishlowなどの著名なブラジル研究者により「新しいブラジル」とも称された（註2）。筆者も他のブラジル研究者の協力を得て、『躍動するブラジル—新しい変容と挑戦』（2013年）という研究成果にまとめた。1980年に結成されたPTは、このブラジルの発展を体現または歩調を合わせるように勢力を拡大し、まさに「新しいブラジル」が実現された時期、ルーラを大統領として

輩出してから長期政権の座にあった。そして2010年、『Lula: o Filho do Brasil（ルーラ—ブラジルの申し子）』というルーラの半生を描いた映画が全国で大々的に上映され、同映画に重ね合わせればPTは“[新しいブラジル]の申し子”と表することができよう。

しかしブラジルは、同国の歴史でかつてない弾劾裁判でのジルマ大統領（当時）罷免やPTの下野とともに、“ポスト新しいブラジル”（註3）と呼べる低迷期を迎えることになった。状況が大きく変わった中、“[新しいブラジル]の申し子”のPTはどう変わったであろうか。ルーラをヒーロー化するような上記映画は、今年と同様に総選挙が行われた年、当時ブラジルの歴史でかつてない規模で上映されたが、そこには『The Economist』（2009年11月12日号）の指摘した「hubris（慢心）」が見て取れた。他の政治家たちも逮捕されている現在、大衆層を中心に依然人気の高いルーラを特別視し、大統領選の候補者として固持するPTの根底に、あの慢心につながるものはないだろうか。裸の王様（註4）かもしれないルーラ頼みのPTは、“[新しいブラジル]の申し子”で閉幕してしまいうリスクさえ考えられよう。

註1：「A verdade vencerá: o povo sabe por que me condenam」。執筆者はルーラ自身となっているが、ルーラへのインタビューを含む本書の編著者はルーラ本人以外。
註2：Albert Fishlowの『Starting Over: Brazil Since 1985』（2011）。ブラジルで先行して出版されたポルトガル語版のタイトルは『O Novo Brasil（新しいブラジル）』。
註3：近田編『The Post New Brazil』（2015年）参照。
註4：Podem avisar ao PT: o rei Lula está nu! (<https://br.noticias.yahoo.com/podem-avisar-ao-pt-o-rei-lula-esta-nu-124915673.html>)。ブラジル版Yahoo（2018年5月17日）。



写真1 PTだけでなくCUTなどの労組や社会運動団体が参加したルーラ支持派デモ（2018年1月24日 サンパウロにて筆者撮影）



舛方周一郎
(神田外語大学専任講師)

あなたはどう見る日系社会



細川多美子
(サンパウロ人文科学研究所 常任理事)

実地調査を終えて (現在集計中)

「日系社会」という日本語はいかにも便利だ。「ブラジルには大きな日系社会があります」という表現で語られて間違いない。ではないが、何かの組織をもって大きな日系社会がひとつにまとまっているわけではないので、あまり正しいともいえない。「日系社会」という言葉には今のところ学術的定義が存在していない。最初の移民から110年の間になんとなく形成され時代とともに変遷し、定義できるポイントをどこに置いたらいいのか誰にもわからなかったのだと思う。

ブラジルでは主に「日系コロニア(Colônia japonesa)」、「日系コミュニティ(Comunidade japonesa や Comunidade Nipo Brasileira)」と呼ばれており、使っている側に明確な違いを意識している場合は少ない。通例的に「コロニア」と呼んでしまうことが多いが、その語源である日本人集団地「植民地」というオリジナルにこだわり、この言葉を嫌う人々も存在するし、現状はかつての植民地コロニアとは異なるものになっていることから改名すべきだと訴える声は100周年のずいぶん前からあがっていた。また、呼び名同様、日系

社会というものがそれぞれの経験知見に基づいて勝手なイメージで捉えられているうえに全体像を一般論的に語りたがる日本人気質が災いし、事実の前に、声を大きく先に言ったもの勝ちというような陰い山々が立ちはだかっていた。誰しも自分の見ているものを感じているものが真実で常識で当たり前のことのように思ってしまうものだが、ブラジルの多様性と各土地間の距離は思わぬ運命の分かれ道を与え、同じ日本人でも同じ道にならない状況から、日系社会は必ずしも一言で語られる簡単なものではなかった。

どんな形であるか詳しくわからないが確実に存在していることだけは事実だという信念で、その実態に近づくべくサンパウロ人文科学研究所で始めた調査が「日系社会団体調査」だ。2016年に着手し、一部の取り残しを除き2018年4月に実地調査をほぼ終えた。何が存在していると日系社会なのか、何がベースになっているのか、その担い手は誰なのか、どのくらいの規模で何をやっているのか、などなど140項目にわたりそれぞれこそ根ほり葉ほりの執拗な調査をした(つもりだ)。

実際の調査地は、ブラジル全国に散らばる「カイカン(会館)」、「ブンキョー(文化協会や文化体育協会)」、「ニッポ(Nipo Brasileira)」、「日本人会」などの呼び名で存在している日系団体で、全国を網羅する完全なリストもないところからスタートした。

初期、「そんな調査は電話ですればいいではないか」、「調査票を送って返答してもらえば資金がかからない」、

「こういう調査は何人かのライフヒストリーを聞いた方が効果的だ」、「日系団体など調査しても意味はない」、内部からは「地方へ行って黄熱病に罹ったらどうする」、果ては「あんたにそんな調査をする権利はない」など、さまざまご意見、いちゃもん、中傷の矢面に立ち、心が瀕死状態に陥ったこともあった。調査を進めるに従い、そうではないことへの確信は揺るがなくなった。実地調査でわからないたくさんの貴重な事実を目の当たりにし、また訪ねた先の団体の方々にも大変親切にいただき、感動このうえない。おみやげを羊羹で済ませてしまったことが心苦しいくらいだ。その詳しい内容については2018年末の集計結果を待っていただきたい。この調査を支えてくれた日本財団と宮坂財団には心から感謝している。

ブラジル全国に日系社会は (量と質と)どれだけあるのか

いくつかの日系団体がブラジルに存在するのか、ずばりいって約430。約15人の調査員で手分けをし、2年がかりで行った。初期段階で過去の資料を基に450から500くらいかとつけた予想からそれほど遠くはなかった。閉鎖したところがものすごく多かったわけではないので、これをボランティアで運営し続けている方々にまず敬意を表したい。ただ「ずばり」といいながら「約」といわざるを得ないのは、以下のような微妙な団体も含まれるからだ。

- ・会長以下役員はちゃんとそろっているが、活動が新年会またはゲートボールくらいしかない。
- ・ここ数年なんの活動もしていないが、運営を続けるために役員の会議は続けている。
- ・会館も売ってしまったが、組織としての名称や権利は残している。

運動会はもっとも大切な行事のひとつ▶

- ・「文化体育協会」のように総合的ではないが、野球チームを基盤にそれと同等の活動をしている。
- ・実質はあまり変わらないが、運営をプロ化したクラブ会員制度のスポーツ施設。

本来対象とした団体は、地域の日本人および日系人の物理的かつ精神的よりどころとして創設されたコロニアの自治体に似た団体とそれに準ずる団体で、運営する役員たちがボランティアであり、文化・スポーツおよび娯楽、親睦の場としての会館がある、またはなくてもその意思がある、そして日本人、日系人としての文化(習慣)を次世代に継承する、ということをも目的として存在しているものだ。

もともと各地で自発的に発生しているものであり、誰かが決めた一定のルールのもとに作られているわけではない。ひとつひとつが独自に進化してきたので、足並みがそろわない。調査の対象に入れるべきかどうかの判断は非常に難しい。一括りにすることがまったくできない。

今回は調査の対象外としたが、日系社会を構成するネットワークは、さらに県人会、日本語学校、スポーツ系(柔道、卓球、野球、テニス、ゲートボール、相撲などの連盟)、文化系(茶道、華道など)、趣味(カラオケ、将棋、囲碁などの連盟)もあるし、各種宗教も盛んに活動している。それらもさまざまな部分で重なり合いながら文化普及に貢献していることも忘れてはいけない。例えば、テニスの日系大会は選手だけで800人が集まる規模で催される。そこには日系精神に基づいた協調性やおもてなし、ボランティア精神、誠実さなどがしっかり貫かれている。

さて、今回対象にした団体に限って言えば、大半が自前の不動産である会館を持っているという点が驚異的だといえる。規模はさまざまだが、舞台や台所、各種運動施設を備えている。資金源は地元の人たちの寄付が主で、戦後はJICAによる援助によるものもある。ブラジル国内にそんな財産をこれほど数多く残しているのは日本人以外にはない。地域の非日系ブラジル人もそう呼ぶ“Kaikan”が町の唯一の文化施設であることも多い。



日系社会は 何を残していくのか

これら“Kaikan”の成り立ちには時代順にいくつかのタイプがある。

- ①いわゆる日本人が集団で入植し開拓した地における日本人会がそのルーツとなるもの。戦前からなんらかの形で団体があり、コロニアのオリジナル。初期担い手は一世。
- ②主にコチア組合の先導や移住斡旋組織、ブラジル政府の要請によってできた日系人+日本人の集団開拓地。戦後に多く創立者たちに一世と二世が混ざっている。
- ③元々コロニアが存在しない土地に公務員や大学教授などで赴任した二世たちが、自分たちが育った会館での活動の記憶を頼りに結成するもの。創立が比較的新しく(30~40年の歴史)、担い手の多くが二世。
- ④移民百周年の記念行事がきっかけになって、改めて日系意識に価値を見出して創設したもの。二世から三世、非日系も多く参加している。

などで、①、②を基盤として③、④が生まれている。日本人・日系人は、一度移住した地からよりよい環境を求めて新たな移住地への移動することが多い。必要に応じてという事情であることが多かったことは容易に想像できるが、結果、広大なブラジル国内、あちらこちらを開拓することになった。二世、三世のポルトガル語に支障がない世代は、政府や大学、企業から請われて地方へ赴任することも多い。ブラジル全国どこにでもいるのがガウショ(南部リオグランデスール州出身者)だといわれるが、今どきはガウショと日系人はどこにでもいる、と

というのが全国の評判になっている。

これら日系団体は、①②の互助会的役割、娯楽施設、子どもの教育(日本学校、一部ではブラジル学校建設)から、日本文化(日系文化と呼んだほうがよく、実質は「習慣」)の維持、継承、普及まで、その目的が変遷した。年間行事としては、運動会、七夕、盆踊り、日本祭りや日系祭り、農産物祭りなど、地域の公に向けてのイベントが数多く開催されている。そこにはおいしい和食(日系食)があり、エキゾチックなアトラクションがあり、安全で時間通りに事が進むということで、どこもブラジル人に大人気の満員御礼状態だ。これをボランティアで運営するのは並大抵の労力ではない。やると決めたからには約束通り実行するというのが日系人魂だ。そして終わったあとは、ゴミひとつない。日系人の間では当たり前のことになっているが、イベントを通じてたくさんのことを日系子弟のみならず、地域に伝えている。

簡単な印象でいえば、日系社会は思っているよりブラジル社会への貢献度が高い。自身はその宣伝が下手くそであり吹聴しないが、地域のブラジル社会が意外にそれをよく知っておりとても感謝している、その証拠が、ブラジル全国各地に作られた鳥居や記念碑だろう。アサイ市ではお城まで建設してくれた。

「日系社会は消えていく」のはいつか必至のことなのかもしれないが、それが自然の流れであるならあえてそれをいわなくてもよいと思うし、それより各地日系社会に携わる人々を少しでも応援していくことが、ブラジル社会を向上させていくことにつながることは間違いない。

▲リベイロン・プレットの会館内調査風景

サンパウロ・グアルーリョス 国際空港間連絡鉄道の開業



平野 司
(フリーランス・コンサルタント)

2018年3月、ブラジルの空の玄関口であるサンパウロ・グアルーリョス国際空港に、待ちに待った鉄道路線の乗り入れが始まった。2014年のブラジルW杯開催に間に合うよう期待されていたが、遅れること4年。ロシアW杯開幕には間に合う形で、ようやく開業にこぎ着けた。ブラジルの運輸交通分野を普段からウォッチしている筆者も初日に乗りに行ったので、その様子をレポートする。

サンパウロ都市圏交通公社(CPTM)が運行する12号線のEngenheiro Goulart駅から枝分かれするこの新線は、13号線と称され、ラインカラーには「ヒスイ色-Jade」を割り当てられた。全長12.2km、総工費23億レアル(約700億円)。

国際空港の最寄り駅となるのは、終点のAeroporto-Guarulhos駅だ。12号線との乗換駅からの乗車時間は約15分。途中にはGuarulhos-Cecapのひと駅のみ設置されている。現在のところ、空港駅発着の列車は13号線内を往復するのみだが、都心でメトロとの乗り換えが可能なBrás駅やLuz駅に直通する列車が、今年7月以降にも走り出すという。

2018年3月31日(土)朝10時にこの新線が開業するとの情報を得て、メトロとCPTMを乗り継ぎ、9時半には乗換駅のEng. Goulart駅に到着した。駅員氏曰く、サンパウロ州知事が乗る報道陣向けのお披露目列車の運行が終わり次第、一般客を乗せた「試験操業」が始まるとのこと。この試験操

業とは、一定期間利用者に無料で開放して問題点を洗い出し、本格営業に備えるもの。舞台で言うなら、観客を入れてのリハーサルだ。開業時点では土・日曜の10～15時のみ実施され、5月にはこれを平日にも拡大。有料でのフルタイムの「開業」は、最終的に6月4日となった。

諸事情あった模様で、一番列車の出発は結局12時にずれ込んだ。空港方面からやってきた列車は、驚くことに満員! どうやら、こちらではなく空港駅を出発する方が一番列車だったらしい。そのまま折り返す試乗客に加えて、乗換駅からの我々を乗せた超満員の空港行きの列車から、車窓を眺める。ほぼ全線が高架のため見晴らしはよい。コリンチャンス・トレーニングセンターこそ目隠しがされ中の様子は見えないが、空港への往復でお馴染みだった高速道路や、沿線の刑務所の塀の中まで眼下に望める。

ところで周りの客層は、どう見ても空港利用者ではなく地元の人たちだ。開業初日とはいえ空港利用客がもう少しいてもいいものだが、ほとんど乗っていないのはどういう事情な

のか? その疑問への答えは、列車が先に進むにつれ明らかになる。途中駅のGuarulhos-Cecap駅では、空港アクセス道路とは駅を挟んだ反対側に住宅地が広がり、さらにバスターミナルが隣接していた。滑走路を眺望しながら滑り込む、終着のAeroporto-Guarulhos駅もまた然り。空港とは反対側の市街地にバスターミナルが併設されている。どちらの駅でも市街地側に相当数の乗降があった。

空港のターミナルビルからは徒歩ではまず行けない離れた場所にこの駅が建設された理由は、兼ねてからの疑問であった。しかし、空港周辺住民の利用が主と想定されていたのだとすれば合点がいく。日本の鉄道にも慣れている身だと、空港に鉄道が乗り入れると聞けば、ターミナル直結の駅へと特別列車が走る姿を連想する。しかし大統領・州知事選があるこの年に合わせ、地域住民の足となる「通勤」路線が開業したのは、何も偶然ではないだろう。なお空港駅から第1～第3のターミナルビルに向けては、無料のバスが出ている。既存のターミナル巡回バスが鉄道駅までやってきている格好だ。京成線しか乗り入れていなかった頃の成田空港駅をどこか彷彿とさせる。

この巡回バスは15分に1本程度と案内されている。8両編成の電車が発着するのに対してバス1台である。空港管理者にしても、鉄道利用は周辺住民らが主というのは織込み済みなかもしれない。

この新線の運賃は、CPTMと共通でR\$4.00なので、破格ではある。しかしTatuapé駅からの空港連絡バス(片道R\$6.15)も未だに走っており、こちらは道路状況によっては空港とを20分程度で結んでしまうため、引き続きその利用価値は高いまだ。また朝夕の鉄道の混雑を考えると、大きな荷物を持って利用するのも憚られる。実際に6月4日の営業運転開始日の朝には、サンパウロ市内への12号線が大混雑のため乗換駅で何本も列車を見送らなければならなかったという事態も発生したようだ。そのため引き続き、タクシーやUberなど車の利用がどうも有用となりそうである。

それでも1985年の空港開港以来、ようやくサンパウロ市内との道路以外のアクセス手段ができたことは喜ばしい。今後一層、利便性が高まることを期待したい。

(編集部註: 在サンパウロの平野氏は在伯通算17年、大学時代に交通経済学を専攻したこともあって世界の鉄道事情に精通している。)



▲鉄道駅と空港ターミナル循環バス



▲空港駅に進入する13号線車両

ニチレイブラジルえび事業史

内山善司
(アマゾナス食品工業(株) CEO)



アマゾナス食品工業(AMASA)の母体は株式会社ニチレイの事業会社のひとつであるニチレイフレッシュである。ニチレイというと、証券取引所では、食品業に分類され、冷凍食品の他冷凍倉庫・物流事業のイメージが強いが、ニチレイグループの歴史は日本全国各地に冷凍倉庫を保有する水産会社の色を濃くして始まり、現在も水産会社大手の一角に位置付けられている。

ニチレイの前社名である日本冷蔵(株)の発足条件のひとつであったため、創業時より漁撈部門を保有していなかったが、そのため、資源の確保を求め、海外事業に早くから目を向けることとなった。

ニチレイグループのブラジル事業の歴史

ニチレイグループがブラジルに進出したのは1957年、ペルナンブーコ州レシーフェにおけるマグロ事業会社であるINBRAPE社(ブラジル水産冷蔵)を設立した。翌1958年には、債権銀行からの申し出を受け、1911年創設の捕鯨会社COPESBRA(北伯漁業)を買収したため、捕鯨を開始した。その後採算悪化によりマグロ事業から撤退、鯨事業も1985年に世界的な捕鯨禁止により、その幕を閉じることとなった。

えび事業に進出したのは、1969年、当時更なる水産資源確保のため、COPESBRA社がパラ州ベレンに支店を開設し、えびの漁獲を開始したことに始まる。1978年には加工の拠点としてAMASA社(アマゾナス食品工業)設立、加工を開始した。

1980年代には保有漁船数も着実に増え、加工場も自社船漁獲のえびだけでなく他社漁船の原料の加工を請け負う等順調に推移、えびを使用した加工品にも取り組んだ。しかし1990年代に入り、安価な養殖えびの台頭による国際価格の下落と、漁撈コスト上昇により採算が悪化し、全漁船を船長に売却、自社漁撈から撤退した。(1992年)

一方、加工工場であるAMASA社は事業を継続、現在は、地元ピンクえびの総漁獲量の約60%を取り扱う主力のえびに加え、地場で水揚げされる魚の加工、販売を行っている。

尚、ニチレイグループが現在ブラジルで行っている事業はえびと、ペルナンブーコ州ベトロリーナに加工拠点を持つNIAGRO社(ニチレイブラジル農産)が行うアセロラ事業の2つである。



AMASA工場外観



漁獲されたばかりのピンクえび

世界でも珍しい独自種

アマゾン河沖の海域で漁獲されるえびは、通称ピンクえび(camarão rosa)と呼ばれ、当該海域でしか漁獲されない独自種である。その華やかな体色と引き締まった身質、えびの旨み、甘みが詰まった味は日本市場でも高く評価され、養殖えび全盛となった現在でも“こだわり素材”として、根強い人気を持っている。大河アマゾンが海に放出する豊富な栄養分がえびを育て、まさしくアマゾンの恵みと言えるえびである。

ブラジル国内販売への挑戦

AMASA社設立から約10年間、えびの日本向け輸出とともに、えびを原料とした加工品の国内販売も行っていたが、その後は輸出に専念、欧米にも販売を広げた。

2006年から、成長するブラジル市場をターゲットに国内販売への再挑戦を開始した。販売は当初苦戦し、地元ベレンの日系食材店、サンパウロの日本食ルートに限られた。

当時から他社によるえびの国内販売は行われていたが、えびの品質やサイズは不揃いで、正味重量も基準未満である商品が主流であった。当社の製品は価格面では割高で、価格を提示しただけで納入を断られることも多かったが、地道な営業活動が続け、日本式品質管理による“真面目な品質”が徐々に評価されるようになり、日本食以外のルートにも販売が拡大するようになった。

2009年には島内日本国大使(当時)の御来訪をきっかけに在ブラジル日本大使館への納入を開始、公邸における会食やレセプションに今も使用されている。

2013年には、えびの国内販売量が輸出を上回り、昨年2017年時点ではブラジル各地15州に販売網も広がり、売上70%を占めるようになった。

更なる事業発展に向け

当地ピンクえびの資源は毎年禁漁期を設ける事により安定したものとなっているが、それでも自然環境等により好不漁は存在する。

その中でより安定した事業展開を行うため、えび以外の水産品の扱い拡充や、加工度を上げた製品の開発に取り組んでいる。そして日本進出企業ならではの誠実な経営、製品作りを貫きAMASAブランドを信頼のマークとしてブラジル国内での認知度をより高めてゆきたい。

ブラジル労働法改正、実務上の読み方(その2)



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本法弁護士、
現在ブラジルで勤務)

連載
ビジネス
法務の肝

前号に引き続き、2017年11月11日に施行された労働法改正について解説する。

1. 暫定措置 808 号の失効

前号で説明したとおり、改正労働法施行直後の2017年11月14日に、改正労働法の内容の一部を修正する暫定措置808号が公布された。しかしながら、同暫定措置は、期限である2018年4月23日までに国会の承認が得られなかったため失効した。そのため、同暫定措置で行われた修正は無効である。

2. 改正法施行前に存在する雇用契約への適用

暫定措置808号において、改正法が、改正法施行前に存在する雇用契約にも適用される旨明記された。暫定措置808号の失効により、この点が再度不明確となったが、2018年5月15日付け官報で、労働大臣が、改正法は、改正法施行前の雇用契約にも適用されるべきとのAdvocacia-Geral da União (AGU) の意見書に同意したことが公表された。もっとも、これは法的拘束力のない意見に過ぎないので、裁判所が異なる判断をする可能性はある。

3. 会社又は株主の責任に関する改正項目

(ア) 株主の責任

株主は労働債務に関して二次的な責任を負うが、改正法において、旧株主の責任範囲が明確化された。具体的には、旧株主は、株主であった期間の債務で、かつ、株主変更に係る定款変更後2年以内に提起された訴訟に関してのみ負うことになった。また、労働債務に関する責任は、会社→現株主→旧株主の順番で負うことが明記された。株式を譲渡した際に、旧株主の責任が不明確であった点が解消された。

(イ) 同一労働・同一賃金

ブラジル労働法では、同一の労働を提供する者に対しては同一の賃金を支払わなければならないというルールがある。改正法により、この適用基準が会社側に有利に変更になった。具体的には、勤務している施設が異なれば同一労働に該当しなくなり(旧法では同一の市内であればかかる要件を満たした)、また、雇用主における勤務期間が4年を超えて離れていれば同一労働に該当しないとの規定が新設された(同一職務の勤務期間が2年を超えて離れていれば同一労働に該当しない規定はそのまま残っている)。

(ウ) 経済的集団の責任

ブラジル労働法では、経済的集団という概念があり、同集団にいる会社は、各社の労働債務について相互に責任を負う。この経済的集団という概念は非常に抽象的で

あるため、裁判所は労働者に有利になるよう広く解釈する傾向にあった。改正法では、この点について、株主が同じという事実だけでは経済的集団に属すると判断されないこと及び経済的集団か否かは共通の利害を有していることや一体的に活動していることを証明する必要がある旨明記された。

(エ) 個人事業主との契約

個人との契約が実態として雇用関係と類似の関係にあると認められれば、契約者は雇用主と同様の義務が課せられる。従来裁判所は、雇用関係と類似の関係にあるか否かについて、独占的な契約か否かを考慮要素の一つとしていた。改正法では、仮に独占的かつ継続的な契約であったとしても、それだけをもっては雇用関係に該当すると判断しないことが明記された。なお、本項目は暫定措置808号により、個人事業主との間で専属契約を締結してはならないとの要件が追加された。同暫定措置は失効したが、今後も何らかの形で同趣旨の変更が加えられる可能性はある。

4. 労働裁判に影響を与える改正項目

(オ) 訴訟費用の負担、罰金

改正法により、低収入者の裁判費用免除の手続が厳しくなった。また、敗訴時の相手方弁護士費用の負担や当事者の不誠実な対応に対する罰金の規定等が新設された。敗訴時の相手方弁護士費用は、敗訴額の5%～15%である。これにより、従前のように、労働者がコストゼロで裁判を提起できることは難しくなった。実際に、2018年1月～3月の新規労働訴訟件数は、前年同月に比較して45%減少した。

(カ) 裁判外での和解

旧法では、裁判外の和解は効力を有しないとされていたが(後日裁判で効力を否定される)、改正法では、裁判外で締結した和解契約に関して、一定の条件のもと、裁判所により承認してもらうことが可能になった。

(キ) 仲裁制度

給与額が社会保障制度の給付金上限額の2倍を超える労働者との紛争に関して、雇用契約に記載することにより、仲裁制度が利用できるようになった。

(ク) 慰謝料

改正法において、名誉毀損等の場合の損害賠償金額(慰謝料)の算定方法が明記された。雇用主及び労働者いずれが原告になる場合も、当該労働者の給与額をベースに、名誉毀損等の度合いに応じて算定される。なお、本項目は暫定措置808号により、基準となる金額が当該労働者の給与額ではなく、社会保障制度の給付金上限額と修正された。暫定措置808号は失効したが、本項目に関しては引き続き議論されていることから、今後も何らかの形で変更になる可能性はある。

ブラジルにおける AEO 制度の最新事情



エルソン・ブルーノ / 吉田幸司
(KPMG サンパウロ事務所パートナー)

AEO(Authorized Economic Operator) 制度は日本では2006年3月から輸出者を対象に導入され、ここブラジルにおいても、多くの企業が AEO 認定業者となりその恩恵を受けている。日系企業の中でもすでに AEO 制度の認定を受けている企業はあるもののまだその数は多くないと思われる。2016年11月号の本誌「税務の勘どころ」でも一度紹介されているが、ブラジルでは税関ストライキにより輸出入に想定以上の時間がかかりコストがかさむといったことも生じており、通関業務の迅速化およびコスト削減にもつながるブラジル AEO 制度の最新事情について改めて説明したい。

ますますのグローバル化及び世界との距離が近づいていく中で、企業の収益を伸ばしていく1つの手法として、プロセスを最適化することが考えられるが、ブラジルでは多くの企業が通関プロセスに時間がかかり、輸出入に携わるすべての企業が損害を被っているとの共通の認識がある。

税関手続きを簡素化するためブラジルでは2015年から AEO 制度を導入している。この制度は、関税法を遵守している限りにおいて物品の安全性について、その企業がオペレーションリスクが低いことを証明できる場合、国際貿易に携わる組織に対して AEO 認定を与えている。

今年のデータでは「保留・却下」が28%

2018年3月31日に発表されたブラジル国税庁のデータによると、ブラジル国内企業から583件の申請書が提出されている。このうち、253件は調査中、169件が認定済、147件は情報不十分のため保留中、14件は提出情報の質が満たされていないとして却下されている。つまり、申請された件数のうち、手続きが進んでいない「保留中もしくは却下」されたものは約28%となっている。

AEO 制度の採用は各企業の任意であるものの、当該制度には多くの利点が存在する。主なものとして、例えば、通関手続の簡素化と効率化、輸入荷物の検査(parametrização)のサンプルチェック対象品の比率の減少、AEO のロゴマークの使用許可及びブラジル国税庁のウェブサイトにて認定会社として会社名が公表されるといったものがある。物流チェーン全体を考えると、輸入業者、輸出業者、運送業者、貨物代理店、通関管理下の倉庫業者、港又は空港運営業者、通関業者が認定を受けることができる。

例えば、フォルクスワーゲン、BMW、ヒュンダイといった自動車メーカーからカーギル、サムソン、ファーウェイ、ジョンソンエンドジョンソン、エンブラエル、タム航空、

UPS、DHL など様々な業種の企業が認定を受けている。勿論、トヨタ、ホンダ、日産といった日系企業も認定を受けている。(Recieta Fazenda のHP 参照)

申請手続きはさらに簡素化

ブラジル国税庁は今年1月から申請書の質問数を減らし、質問内容の集約を図ることで申請手続きの簡素化を図っている。以前に比べて質問数が減りその点については対応が簡単になったものの、すべての質問に対して回答する必要があり、また、将来計画に関連付けて回答することは認められていない。(例えば将来、防犯カメラを設置する予定ということでの回答は認められず、あくまで現在の状況に基づいて回答することになる)

AEO 認定企業は、未認定企業との違いを認識することができる。一例として、AEO 認定企業が行う海上輸入の場合、船が港に到着する前に事前に輸入する商品について輸入許可を得ることができる。輸入許可に時間がかかるといった場合、AEO 認定企業であれば、事前に輸入認可を得ているため、港内での輸入許可待ち時間を大幅に短縮することが可能である。この場合には、例えば通関所要平均日数が10日とすると、それを1日に削減することも可能である。

認定取得までの期間は半年から1年

なお、ブラジルにおいて AEO の認定を受けるためには、国税庁の質問書の項目すべてに応じて申請書を提出し、国税庁の審査を得る必要があるが、AEO 認定を取得するのに要する期間は、企業によっても異なるが、私どもの経験上、平均して6カ月から1年である。また、AEO 認定を最初に受けてから継続する場合には3年目には更新手続きが必要となり、更新のための申請書を国税庁に提出をし、国税庁が審査を行うことになる。場合によっては、5年間の更新が可能となる場合もある。

移転価格制度では OECD モデルとはかけ離れているなど独自色が多くみられるこのブラジルにおいて、AEO 認定制度が世界税関機構(WCO)の枠組みに沿って導入されているため、国際化に向けての対応は進んでいるといえよう。AEO 制度により、税関手続きの削減によって企業はより迅速な輸出入を行い、それがコスト削減となる可能性もあり、当該制度を適用する企業は今後ますます増えていくと思われる。

サバイバル・ドライブのすすめ



ドライブの良さといえば、時間や荷物の量にも縛られず、その日の天気や気分に合わせて自由に行動できることではないだろうか。ブラジルでのドライブ旅行は、広大で豊かなブラジルを満喫でき自由そのものだが、時にはサバイバル気分も楽しめる。

サンパウロから西の州境まで約650キロ、首都ブラジリアまで約1,000キロ、イグアスの滝まで1,100キロ前後もある、そんな大きいブラジルでは、路面状況や大型トラックに気を付けつつも、信号がほとんどないので1時間80~100キロ平均で移動可能だ。

私は2016年末までの5年間、サンパウロにある現地会計事務所に最初の日本人として単身派遣され、日系企業に対する監査や税務サービスを提供していた。そのため、一人でのドライブが多く、途中天気が良ければ運転を楽しみながら距離を稼ぎ、何か面白そうなものに出会ったらそこでしばし小休止。眠くなったら、日本から持参した昭和歌謡を大声で熱唱。その日の寝床は、道端で見かけた看板や現地のガイドブックで良さそうなモーテルやファゼンダ・ホテルを決めて、電話かフロントでその日の晩に直接交渉だ。

初心者向けのルートとしては、ミナスジェライス州のディアマンティーナからオーロレット、世界遺産のコンゴニャスを経て、チラデンテス、サンジョアンデルレイに抜ける「Estrada Real」。サンパウロから4日程度で往復でき、舗装状態も概ね良好で、途中は農場や自然が広がり適度に山や都市もあり飽きることがない。チラデンテスでは乗馬やトレッキングも楽しみつつ高原の爽やかな空気を満喫できる。

冒険者向けのルートとしては、マットグロッソドスル州のパンタナール及びエマス国立公園。パンタナールの南側を横切り、1月から6月の雨季には水没して通行不能となる「Estrada Parque Pantanal」は、無数のワニやピラニアが生息する川を跨ぐ71もの木橋を越えて野生動物の宝庫の中を進む総延長120キロの未舗装路だ。エマス国立公園では、セラードの生態系をそのまま残した園内を自走でき、運が良ければジャガー、バク等の大型野生動物を見られる。11月に最盛期を迎えるアリ塚の発光現象もとても幻想的だ。どちらも、州都カンポグランジに立ち寄れば沖縄そばも味わ

赤澤賢史
(あずさ監査法人パートナー、当協会理事)



える。

ブラジルで飽き足らなくなったら、イグアスの滝からパラグアイ経由でアルゼンチンに抜け、ブエノスアイレスを楽しんでから、フェリーで対岸ウルグアイに上陸しブラジルに戻る約5千キロ4カ国周遊の旅はいかがだろうか。各国の違いがけっこうわかり、近隣国でもポルトガル語は何とか通じる。

ブラジルでのドライブ旅行は楽しい半面、しばしばサバイバル経験も味わえる。ブラジルの舗装は滑りやすく(特に雨の日)、舗装状況も悪いところが多い。ゴイアス州やミナスジェライス州、各州の州境付近、鉱山の近くなどでは特に注意が必要だ。私の愛車は日本製の4WDタイプで比較的悪路には強かったが、舗装された山道を走行中、道の真ん中に空いた大きな穴の縁にタイヤの内側をぶつけてタイヤがバーストしホイールまで変形したことがあった。その場でスペアタイヤに交換し旅先で聞きまわり何とか整備工場を見つけ古タイヤで応急処置を施した。ブラジルでは道が地図通りでないこともしばしばだが、とにかく多くの人に聞くことは何らかの解決策を与えてくれる。

また、山道を走行中、工事現場からオイルが流れて路面を覆い、時速10キロ前後でもほとんどハンドルが利かなかったこともあった。減速帯や速度自動取締機はどこの幹線にもあることもあり、旅先での修復不能な事故を避けるためにも、常に余裕を持った速度で運転すべきだ。

ホテルの部屋は概して衛生的だが蚊はいるので殺虫剤はお忘れなく。また、男友達と二人でドライブした時、ダブルベッドの部屋をあてがわれて慌てたこともある。確約前の部屋の下見は欠かせない。食事についても、道端にはほぼボルキョやランシヨネツシがなく、美味しいお店は大抵大きい街の中心部にしかない。そのような食事に飽きた時のため、日本のインスタントラーメンと携帯湯沸かし器も携帯すると便利だ。

さらに、地方で意外と使えなくなるのが携帯電話のGPS機能。車載専用GPSとコンパスは悪天候下や夜間の走行に役立つ。給油についても、次のガソリンスタンドが150キロ先といったこともあるので、余裕をもって給油すべきだ。車内での仮眠もお勧めしない。なお、地方では英語が全く通じないので、ポルトガル語も必須だ。

ブラジル国外に出る際には、事前に各国のガソリンの呼称の違いや交通法規を確認し、必要な法定備品を調達して積んでおくとともに、Carta Verdeと呼ばれる自動車保険に加入してその保険証を携帯することが必要だ。自由だけれどちょっと刺激的、皆さんもこんなサバイバル・ドライブでブラジル(及びその周辺国)を満喫してみませんか？



ブラジルのストレスマネジメント

中妻由紀
(ブラジル日本交流協会 16期生)

ブラジル人に陽気なイメージを持っている人が結構いると思うが、悩み迷い苦しみながら生きているのは日本人と同じ、世界中誰だってそうだろう。ストレスを無くすことは不可能、ではどのようにストレスと付き合っていくか。

ブラジルでは、日本ではあまり見ない形でストレスマネジメントが行われている。それは、医療行為ではないカジュアルな「カウンセリング」だ。日本ではカウンセリングを受けているのは心の病のある人が大半で、そうではない人が通っているという話はほとんど聞かない。

しかし、ブラジルには心理学者やセラピストが沢山いて、彼等の元に毎週習い事のような感覚で通いカウンセリングを受けている人が大勢いる。

ブラジル滞在中、30人超の人にアンケートを取ったところ、半数以上がカウンセリング経験者、10名は現在通っているとの回答を得た。母数が少ないのであまりあてにならないかもしれないが、少なくとも私の周りにいたブラジル人にとって、カウンセリングがこれほどまでに身近なものとは

驚いた。その中には、うつ病を抱えていて、薬を飲みながらカウンセリングを受けているという人が1名いたが、残りの9名は精神的な病を抱えているというわけではなかった。特に大きな悩みが無くても、心を安定させ、よりよく生きるために通っているという声もあった。不調を抱えているからカウンセリングへ行くのではなく、彼らは心のメンテナンスをしているのだ。

カウンセリングの効果について聞いてみたところ、「日々の出来事を振り返るのによい」「過去と向き合い現在の感情を安定させる」「考えを深める」「以前より自信が持てるようになった」といった意見が出たが、心の安定のために通っている人が多いようだった。ブラジルはストレスマネジメント先進国なのかもしれない。

日本にも、あまり知られてはいないがカウンセリングが受けられる場所はあるようだ。誰かに聞いてもらいたい悩みがある時はもちろん、心を安定させてよりよく生きるために、通ってみるのもいいかもしれないと思った。

ジャーナリストの旅路

「歴史」を学んだブラジル駐在

持永秀樹
(元日本経済新聞サンパウロ支局長)

ブラジルを拠点にアルゼンチン、チリ、ベネズエラ、キューバなどラテンアメリカ各地取材で回った。今、そこで触れ合った人々との「歴史」が蘇ってくる。取材した記憶は年々、遠い彼方に去ろうとしているが、各国の将来を思うと「期待」と「悲観」が交錯しながら「成長」と「停滞」を繰り返す様に思えてならない。

言うまでもなくラテンアメリカは、ヨーロッパ民族との「遭遇」が進む前は、高度に発達した先住民の歴史・文化が存在していた。15世紀後半、ヨーロッパがスペイン、ポルトガルを中心にラテンアメリカの歴史に密接にかかわって来る。そのヨーロッパもまた、西暦300年~700年にかけてアジアなどからの「民族大移動」によって、今の原型が作られた。戦争や貧困、民族紛争による「現代版民族移動」が起きている。こうした政治的な状況は、ヨーロッパの歴史もまた、ラテンアメリカと同様に「成長」と「停滞」を繰り返している様に思える。

多くの民族の融合を経たヨーロッパ各国では今、自分の国の「歴史」を知って貫うために歴史ドラマのコンテンツ制作が盛んである。「歴史や文化」を輸出するためだ。自

国内に点在する歴史的な「文化遺産」を使った番組作りを政府が後押ししている。ここ数年、「イサベルー波乱のスペイン女王」、スペイン、ポルトガル、イタリア合作の「女王ファナー波乱のスペイン女王」(イサベル女王の娘で神聖ローマ皇帝カール5世=カルロス1世の実母)、「カルロス一聖なる帝国の覇者」を中心に、ロシアでは「エカチェリーナ2世」、トルコでは「オスマン帝国外伝」、英国では「クイーン・メアリーー愛と欲望の王宮」などが人気を得ている。日本も来年、「文化財保護法」を改正して、文化遺産を有効に使うとしている。遅きに失した感もあるがスタート台には立った。

ラテンアメリカ諸国の中で、ブラジルがポルトガル語圏で、他の大半が何故、スペイン語圏なのか、こうしたヨーロッパの事情がある。スペイン、ポルトガルとの間で結ばれた「トルデシリャス条約」が発端だが、これからラテンアメリカを目指される人は、実務につく前に「歴史」をもう一度、ひも解いて見られてはと思う。「歴史」を学ぶ事は将来を予測する上で重要である。なぜなら、「歴史」は繰り返すからだ。

追悼：ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス監督 「シネマ・ノーヴォ」を創始した「ブラジル映画の父」を偲ぶ

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

映画監督としても批評家としても活躍したグラウベル・ローシャ（1939-1981）は、その著書『シネマ・ノーヴォ革命』（1981年）において、「ネルソン・ペレイラとゴダールの二人がシネマ・ノーヴォの創始者だ。ヨーロッパの諸矛盾にブラジルの諸矛盾が重なり合ってきたものだ。イタリアのネオリアリズムにとってのテーマは、社会であった。ヌーヴェル・ヴァーグにとつてのテーマは、映画であった。シネマ・ノーヴォにとつてのテーマは、ブラジルにおける世界の不在であった。」と断言した。

その、巨匠ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス（1928-2018）が、4月21日、永眠した。享年89歳。死因は肝臓ガンによる多臓器不全であった。

ブラジルの主要メディア（TV、新聞）は、当然ながら、21日夕方から翌22日にかけて、ネルソン・ペレイラ監督の歴史的足跡を讃える番組を放送し、追悼特集記事を掲載した。

欧米のメディアはどう報道したか。フランスの有力紙ル・モンドの4月22日付け追悼記事の書き出しは、「映画監督としては初めてブラジル文学アカデミー会員になり、ラテンアメリカ・ネオリアリズムと「シネマ・ノーヴォ」のバイオニアであったネルソン・ペレイラ・ドス・サントスが4月21日亡くなった。」であった。



4月27日付けニューヨーク・タイムズ紙の記事は、こう始まる。「（軍政時代）政府当局からブレッシャーがあったり、制作資金面で常に苦労したり、と様々な困難があったにもかかわらず、ブラジル映画という存在を質的に高めたネルソン・ペレイラ・ドス・サントス監督が4月21日亡くなった。享年89歳だった。」

5月3日付けザ・ガーディアン紙記事は、「1950年代までのブラジル映画は、世界から全く注目もされなければ海外へ影響を及ぼしたこともほとんどなかった、と思われていた。だが、先日、89歳で亡くなったネルソン・ペレイラ・ドス・サントスはルイ・ゲーラやグラウベル・ローシャと共同で「シネマ・ノーヴォ」というエクサイティングな新しいブラジル映画潮流を展開し、ラテンアメリカ全域の政治的な映画界に活力を与えることになった。」と書き出していた。

では、日本のメディア（新聞社、通信社）はどうだったか。サンパウロやリオに支局・駐在記者を置いている大手は、追悼記事を行行も掲載しなかった。“全滅”であった。日本のメディアの“文化識字率”の低さが、またしっかりと再確認されたのだ。



サンパウロ市プラス区で生まれ、名門サンパウロ大学法学部を卒業したものの、法曹界には行かず、リオに移住して映画人生を歩み出したネルソン青年がまず手掛けたのは、映画批評だった。米国流メロドラマ映画を批判し、あるべきブラジル映画は「映像技術よりも内実に価値を置く、戦闘的な民族映画」「ただし、ハリウッド映画の技術レベルを下回らない映画」である、と主張していた。

その持論に基づき、協同組合方式で資金を調達して制作したのが、ファヴェーラの少年たちの日常をドキュメンタリータッチで映像化した『リオ40度』（1955年）であった。この長編映画がもたらしたインパクトの大きさは、今日では想像できないほどであったが、ネルソン・ペレイラが国際的な評価を得たのは、『乾いた人生』（1963年）からである。

この作品は作家グラシリアーノ・ラモスの古典的小説を映像化したものだが、ノルデスチ（北東伯）内陸部を流浪する早魃難民家族の日常をローアングルから撮影した佳作である。ノルデスチには数多くの“乾涸びた人生”があることを静かに糾弾した作品は、グラウベル・ローシャ監督の『黒い神と白い悪魔』（1963年）とともに1964年の第17回カンヌ映画祭に出品され、この二作によって「シネマ・ノーヴォ」が世界に認知されることとなった。

その後、植民地主義批判といえる『私が食べたフランス人』（1972年）、ジョルジ・アマードの原作を映画化し人種偏見問題を取り上げた『奇蹟の家』（1979年）、独裁政権下での良心的知識人の苦悩を描く『監獄の記憶』（1984年）などの話題作を発表、2000年以降は、ブラジル文化追究ドキュメンタリー作品群『大邸宅と奴隷小屋』（2000年）、『ブラジルのルーツ』（2004年）、『ブラジルの国語、ポルトガル語』（2009年）、『トム・ジョビン』（2012年）などを精力的に発表していた。

ネルソン・ペレイラは、ブラジリア大学などで大学教授（例えば、チズカ・ヤマザキは教え子）も務め、2006年には映画人としては初めてブラジル文学アカデミー会員に選出されている。

1999年、2000年、2001年、2010年の4回訪日したネルソン・ペレイラ監督は、日本酒をこよなく愛していた。筆者も何回か歓談したことがあるが、お銚子を前にした時の、お茶目なインテリ好々爺の笑顔はなんとも素敵だった。合掌。

大統領選挙予想：最新世論調査結果

6月10日、次期大統領選挙に関するDatafolha社世論調査（6月6日～7日実施、174市、2824人対象）結果が発表された。各候補の支持率は以下の通り。

1. ルーラ出馬の場合

ルーラ（PT）	30%
支持者未定	21%
ボルソナーロ（PSL）	17%
マリナ・シルヴァ（REDE）	10%
シロ・ゴメス（PDT）	6%
アルキミン（PSDB）	6%
ディアス（PODEMOS）	4%

決選投票の場合の予想、

- ①ルーラ（49%）×アルキミン（27%）
- ②ルーラ（46%）×マリナ・シルヴァ（31%）
- ③ルーラ（49%）×ボルソナーロ（32%）

と相手が誰であれルーラが勝利。

2. ルーラ不出馬／PT候補アダッジ（元サンパウロ市長）の場合

支持者未定	33%
ボルソナーロ（PSL）	19%
マリナ・シルヴァ（REDE）	15%
シロ・ゴメス（PDT）	10%
アルキミン（PSDB）	7%
ディアス（PODEMOS）	4%
アダッジ（PT）	1%

ルーラなし決選投票のいくつかのパターン予想

- ①ボルソナーロ（32%）×マリナ・シルヴァ（42%）
- ②ボルソナーロ（34%）×シロ・ゴメス（36%）
- ③アルキミン（27%）×マリナ・シルヴァ（42%）
- ④シロ・ゴメス（29%）×マリナ・シルヴァ（41%）
- ⑤シロ・ゴメス（32%）×アルキミン（31%）

というようにマリナ・シルヴァ有利と出た。

トラック運転手ストライキ

ディーゼル価格上昇に反対するトラック運転手のストライキの影響については概略下記の通り。

1. トラック運転手ストライキの経過

（1）5月21日、トラック運転手がディーゼル価格上昇に反対して全国19州で道路の封鎖を開始する。2017年7月3日以来ディーゼル価格は56.5%上昇していた。

（2）22日、連邦政府は燃料税（CIDE）の税率をゼロに引き下げることを約束するも、トラック運転手は抗議デモの継続を決定。サントス港のトラックの行列は1.2キロに到達。

（3）23日、トラック運転手の抗議活動拡大を受けて、ベトロブラスはディーゼル価格を10%引き下げる。全国各地に供給不足の問題が広がる。

（4）24日、フォーリャ・デ・サンパウロ紙によると、アマパ州を除く25州1連邦直轄区496箇所で封鎖が確認された。パラナ州では86箇所、ミナスジェライス州45箇所、リオグランデ・ド・スール州38箇所、サンタカタリーナ州36箇所、バイーア州30箇所の順。

（5）ストを主導した全国運転手協会と政府は燃料税の減免などで

合意したが、多くの運転手はストを続行、収束に向かったのは6月初旬すぎから。結局2週間以上も全国の物流網は瀕死の状態が続いた。

2. 影響

（1）概要

総合週刊誌VEJA（6月6日号）の推計によれば、今回のストライキがブラジル経済に与えた損害額は最低でも600億レアル（凡そ1.8兆円）。ブラジルの貨物輸送は、63%がトラック輸送で、鉄道輸送は21%に過ぎないため、あらゆる物流が完全にマヒ状態に陥った。

（2）各部門毎の影響

（ア）食料

サンパウロ中央卸売市場（Ceagesp）によると食品価格が上昇しており、5月23日時点でCeagespの卸売価格が著しく上昇した商品は、じゃがいも（94.8%）、ケール（49.1%）、かぼちゃ（42.8%）、トマト（26.3%）、マンゴ（22.8%）、パイナップル（22.0%）であったが、5月末には生鮮品の物流がストップ状態に。

（イ）空港

フォーリャ・デ・サンパウロ紙によれば、ブラジリア、ゴイアニア、イリエウス（バイーア州）、レシーフェ、テレジーナ（ピアウイ州）の空港で燃料供給が中断。

（ウ）公共交通

5月24日、サンパウロ市では、ピーク時にバス運行台数が15%減少した。サンパウロ市交通局下部組織のSPTTransは、25日はバス全体の50%に影響が及んだ。

（エ）工業

自動車生産がほぼ一週間全面的に停止、約5万台の生産が中断された。生産を中断した企業には、GM、フォルクスワーゲン、フォード、トヨタ、ルノー、日産、Caoa/Hyundai、PSA、Chery、MAN、Scania、Volvoなど。

（オ）食肉

鶏肉及び豚肉：5月24日までに国内の食肉加工施設180箇所のうち少なくとも120箇所が稼働停止。計17万5千人の従業員が休日を与えられ、損失は輸出だけを見積もっても1億ドル以上とされる。鶏は飼料不足で飼育数の7%にあたる7千万羽が餓死、食肉業界が原状回復するには半年以上かかるとみられる。

（カ）スーパーマーケット

様々な商品の入荷が制限されるようになり、多くの欠品が出ていた。

（キ）病院

全国医療連盟（CNS）が、医療機関は既に「サービスの維持及び患者の安全のために欠かせない医療用ガス、麻酔用品、医薬品などの欠品」を被っていると述べた。

（ク）ガソリンスタンド

全国各地で、ガソリンスタンドの燃料は底をつき、在庫のあるスタンドには車が長蛇の列をなしていた。

3. ペトロブラス（国営石油会社）への影響

パレンテ・ペトロブラス社長は責任をとって辞任。同社株式は3割以上下落した。

4. 国民の支持・反発

当初はブラジル人の多く（70%ほど）がストライキに同情したが、日常生活に決定的な影響が出てくると、支持者のほとんどが反対に転じた。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『移民の町サンパウロの子どもたち』
(ドラウジオ・ヴァレーラ著、伊藤秋仁監訳)

刑務矯正医官としての体験に基づく話題作『カランジル駅』はバベンコ監督によって映画化されたが、その著者は医師にして大学教授、さらには作家にしてテレビ解説者としても活躍している。そんなマルチオ人の児童文学作品「ブラースの町で」は1940～50年代のサンパウロを活写しているが、これをテキストにしていた社会人講座の勉強の成果がこのほど一冊になった。翻訳（共訳）＋訳語解説＋ブラジル事情解説という三部構成になっている。（行路社 2018年3月 196頁 2,000円＋税）

『日本人と海外移住』
(日本移民学会編)

「移民の歴史・現状・展望」についての論稿が複数収録されている論集。ブラジル関連では、第5章ブラジルの

移民政策と日本移民（三田千代子）が、ブラジル史における人種主義と外国移民との関連を論じ、第9章在日ブラジル人／デカセギ移民（アンジェロ・イシ）、は在日の「日系／ブラジル系」移民が歴史的には二面性があることを明らかにしている。北米・南米・アジア・満州移民について、改めて多面的かつ多義的に考察されている。（明石書店 2018年4月 302頁 2,600円＋税）

『ブラジル映画史講義』（今福龍太著）
これほどまで通時的にも共時的にも深く鑑賞され読み込まれば「ブラジル映画」も擬人化したら幸せだろう、と思わせる映画史講義だ。「黒いオルフェ」、「リオ40度」、「黒い神と白い悪魔」、「マクナイーマ」、「パイパイ・ブラジル」、「キロンボ」などの映画作品について博覧強記的に論じられているが、1980年代で終わっているのは、著者が1990年代以降の映画群を「ブラジル映画」というアイデンティティを喪失した“別物”と考えるからだ。（現代企画室 2018年5月 472頁 2,700円＋税）

『被抑圧者の教育学 50周年記念版』
(パウロ・フレイレ著、三砂ちづる訳)

識字教育における「意識化」、「銀行型

教育ではない問題解決型教育」といったタームによって世界の教育思想界にインパクトを与えたフレイレ（1921-1997）の polemick な教育哲学書も今や半世紀を迎えた古典になった。ポルトガル語からの新訳（2010年）に、米国で刊行された「50周年記念版」に付された「まえがき」「あとがき」「複数の研究者とのインタビュー」を加えた特別記念版がこの度刊行された。（垂紀書房 2018年5月 406頁 2,600円＋税）

『話したくなる世界の選挙～世界の選挙をのぞいてみよう』
(コンデックス情報研究所著)

世界各国の選挙制度の特徴を図解入りで紹介・解説している中高生向けのムック本。世界の法制事情に詳しい太田雅幸弁護士が監修しているので、正確にして客観的な叙述になっている。話したくなるランキング1位はオーストラリア、その理由は投票率の高さ。2位に選ばれたのがブラジルで、選挙権は18歳からだが希望すれば16歳で選挙権を取得できるから。世界第2位に評価されたブラジルの総選挙は今年10月だ。（清水書院 2016年8月 143頁 2,376円＋税）



価値を生み出す厳選された情報

中南米経済速報

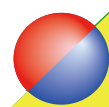
経済情報を毎週月曜日にお届けします。地域経済圏の動き、インフラ整備やエネルギー・資源開発、各国のマクロ経済、投資案件、労働問題などを日本語でお読みいただけます。

■購読料：14,000円／月（税別）

CRONICA（クロニカ）

政治・治安情報を速報でお届けします。月～金に速報版を、火・金にレギュラー版を配信します。社会情勢、犯罪情報、武器密輸、麻薬問題、自然災害などを取り扱います。

■購読料：30,000円／月（税別）



日本ブラジル中央協会 からのお知らせ

協会イベントのご案内

参加のお申し込みは、協会HP
お申し込みフォームにてお願いします

9/15 ブラジル 駐在員家族(駐在妻)のための渡航前セミナー 限定12名様の少人数での開催

渡航前は慌ただしく、新しい生活についての情報収集や、語学（ポルトガル語）習得に、どれくらい時間が割けているでしょうか。同じ境遇との仲間と共に、少しでも具体的な現地情報に触れ、ご自身の新生活のイメージをより具体的に考える機会にしましょう！まだ渡航を決めかねている方のご参加も可能。

日 時：2018年9月15日（土）13:00～17:30
場 所：日本ブラジル中央協会 事務局内会議室
住 所：港区新橋1丁目18-2 明宏ビル本館5階
参加費：3,500円（軽飲食・資料・ブラジルガイドブック付）
※事前振込順に先着とさせていただきます。

11/2 アンドレ・コヘア・ド・ラーゴ 駐日ブラジル特命全権大使 講演会

日 時：2018年11月2日（金）15:00～16:30
場 所：ビジョンセンター田町
住 所：港区芝5-31-19JR
山手線・京浜東北線 田町駅（三田口）徒歩2分
都営浅草線・三田線 三田駅（A3出口）徒歩1分
参加費：個人会員1,000円、法人会員2,000円、非会員3,000円
※演題等、詳細は未定です。決まり次第HPに掲載します。

2018年 秋期 ポルトガル語講座 9月前半に開講!

当協会では、“楽しく学ぼう！学んで話せるポルトガル語！”をモットーに実用ポルトガル語講座を開講しております。
日程、クラスなど、詳細が決まり次第、HPに掲載します。

!!「びっくり豆知識」!!

歴史に残る「非核化のモデル」

犬猿の仲はどこかで仲直りをすればいいが、これがなかなか難しい。そこに親戚や大物が横やりでも入れば話は一層こじれ、せっかくの合意のチャンスも失う。今の米朝関係を見ていると、そんな気がする。6月12日の首脳会談も大騒ぎすることはない。予想通り(?)「非核化」や「拉致」は不透明のまま終わった。

トランプ氏に教えたいが、ラテンアメリカには27年目を迎える理想的な「非核化モデル」がある。ブラジルとアルゼンチンは1991年、核の平和利用を定めた2国間の条約を結んだ。大事なのは「核開発の相互監視」で、そのために「ブラジル・アルゼンチン核物質計量管理機関（ABACC）」という新組織を創設した。お互い敵視するのは金輪際やめようという意思表示である。

ブラジルとアルゼンチンは国際社会では仲が悪いことで有名な南米の大国同士。サッカーW杯でお互いが負けると大喜びするおかしな関係だ。日本にとっても仲の悪い隣国がいくつか存在する。だからこそ、歴代の政治家たちは隣国同士が戦争しないように考えてきた。南米の両大国が「核放棄」で足並みを揃えたのは、それぞれに民主政権が誕生したことが大きい。両国は「丸腰」になり、お互いに核関連施設を視察

し合うまでになった。

一方北朝鮮は「核抑止力」という軍事理論を信じて、核ミサイルと核弾頭の開発にまい進した。同国にとっては命綱の「抑止力」は簡単に手離すわけがない。北朝鮮は先ごろ核実験施設を爆破し、一部メディアにその瞬間を見せつけた。まるでマンガやアニメのようで、外国メディアもあきれたことだろう。この手の「だまし戦術」は北の得意技である。

しかし、ブラジルとアルゼンチンはこの「抑止力」を放棄した。お互いが核兵器で攻め込むことはしないという世界でも珍しい条約である。

「核を持つ抑止力」と「核を持たない抑止力」——夢物語のようで理解できないという人もいるが、両国の関係は「核を持たない」ことで緊密になったのではないか。そもそも「戦争嫌い」と評されるブラジルである。1982年、アルゼンチンが英国相手にフォークランド（マルビナス）戦争を引き起こした時、英国はブラジル政府に「空軍基地使用」を依頼した。しかしブラジルは「アルゼンチンは友人だから」ときっぱり断ったと伝えられる。犬猿の仲と言われつつ心の奥底には仲間意識がある、と妙に納得した覚えがある。(W)

—— 皆様のご入会を心よりお待ちしております ——

法人・個人

新規会員募集中

会員数 2018年6月現在
法人会員 119社
個人会員 約330名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布 隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、参加できます（会員限定イベントへも参加いただけます）
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費

入会金は不要です

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) (1口以上)

お申込みは
こちらから

《日本ブラジル中央協会公式HP》
<http://www.nipo-brasil.org>



当協会の隔月発行の機関誌「ブラジル特報」及びホームページへのバナー広告掲載企業を募集しております。
広告掲載にご興味がある企業は、協会事務局までご連絡下さい。
事務局 E-mail: info@nipo-brasil.org

ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia (ブレイジア) では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia (ブレイジア) 運営: 株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL03-6263-0716
お問い合わせは E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com/>

TDB
TRADE & DEVELOPMENT BANK
モンゴル貿易開発銀行東京駐在員事務所

“蒼天よりも高く”

突き抜けるような雲ひとつない青い空 — 蒼天(そうてん)
モンゴルは蒼天の国です。そのモンゴルでリーディングバンクとして活躍している銀行がTDBです。日本とモンゴルの間の貿易・投資に関わる貿易金融や外国為替を取り扱っています。私たち東京駐在員事務所はモンゴルの蒼天につながる日本の玄関口です。日本のお客様からのご相談をお待ち申し上げております。

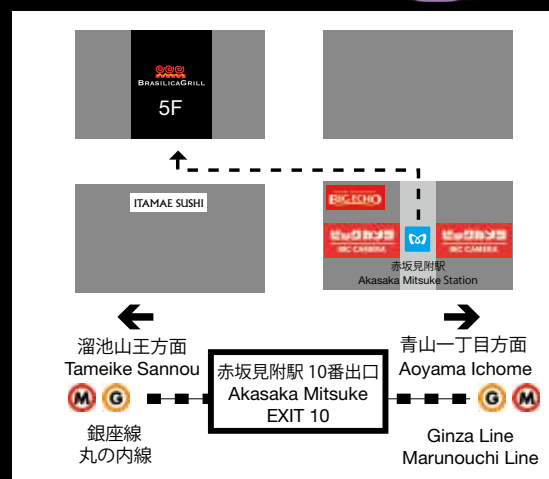
BRASILICAGRILL
CHURRASCARIA

ブラジル バーベキュー食べ放題
+ ビュッフェ
¥5,400 (税抜き/tax not incl.)

ALL
YOU
CAN
EAT | 食べ放題

予約:
www.brasilicagrill.com

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-4 赤坂月世界ビル5階
Tokyo-to Minato-ku Akasaka 3-10-4 Akasaka Getsu Sekai Bldg. 5F



モンゴル貿易開発銀行東京駐在員事務所
〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-4-1
丸の内永楽ビル2303
TEL: 03-4588-3945
FAX: 03-4588-3947
<http://tdbm.jp/> 詳しくはコチラ→



◎ 最寄り駅: 東京メトロ東西線大手町駅B1出口直上





新日鐵住金

あらゆるものづくりを支え、
いつの時代も未来を拓く素材の主役、鉄。
その大いなる可能性を極限まで追求し、
日本と世界の発展、そして豊かな社会の創造に
貢献することが、私たち新日鐵住金の使命です。
世界最高水準の技術とものづくりの力で、
もっとグローバルに、もっと先進の鉄へ。
「総合力世界No.1の鉄鋼メーカー」をめざす、
私たちの挑戦に限りはありません。

www.nssmc.com

限
り
な
い
鉄
の
未
来
を
め
ざ
す
。



世界の鉄へ

しんにつつすみきん